

『廣松 涉著作集』刊行記念

■講演とシンポジウム■

転換期の哲学

日 時 1996年6月21日(金)
午後1時～4時30分

会 場 星陵会館

主催 = 岩波書店 協賛 = 河合文化教育研究所

[テーマ]

転換期の哲学

[趣旨]

このたび私たちは『廣松涉著作集』全16巻の刊行を記念して、講演とシンポジウム「転換期の哲学」を企画いたしました。「転換期の哲学」というテーマは、二重のメッセージを身に帯びています。一つは、ベルリンの壁の崩壊とソ連邦の解体に象徴されるように、現代は人類にとって文字どおりの「転換期」であり、そうした時代の危機を根底から省察する哲学の出現が要請されている、という意味です。もう一つは、その哲学自身がかつてない「転換期」に直面して進むべき方向を見失っており、哲学の自己革新が求められている、という意味にほかなりません。現代の哲学は、戦後の一時期に実存主義やマルクス主義がもっていたような知的指南力をすでに喪失し、文献解釈と知的ゲームへと両極分解を遂げつつあるように見えます。しかし、哲学が人間存在を根本から捉え直し、物事を原理的に考え直す作業であることを止めない限り、それは時代の喉元に突きつけられた刃であり、知的冒険の跳躍台であり続けるはずです。21世紀を目前に控えた時代の「転換期」のただ中で、哲学は今いったい何をなしうるのか、また何をなすべきなのか。これを問おうというのが、私たちが今回のテーマに「転換期の哲学」を掲げた理由です。

廣松涉の哲学は、まさにこのような時代と哲学との二重の「転換期」を身をもって生き抜き、「近代」を乗り越える新たな知の地平を拓こうとするものでした。また廣松哲学は、狭い哲学の専門領域に閉じこもることなく、絶えず自然科学や社会科学における最前線の成果と対話を重ねながら哲学的思索を遂行したという点で、類例のない拡がりと深さをもっています。今回のシンポジウムで私たちは、廣松哲学の「テーゼ」を復唱するのではなく、他分野に向かって開かれたその「スタイル」を継承することによって、彼が残した哲学的遺産の意味を受けとめたいと考えています。そのため講演者とパネリストには、哲学のみならず精神医学やヨーロッパ思想史の分野で脱領域的な活動を続けておられる第一線の方々をお迎えいたしました。もとより、哲学は安易な「結論」やその場しのぎの「解決」を与える学問ではありません。むしろ、真摯で切実な「問い」を提起することによって、時代の要求する課題に明確な「形」を与えることこそ哲学の本領と言うべきでしょう。活発な討議を通じて、「転換期」にふさわしい新たな「問い」の形がほの見えてくることを期待いたしたいと存じます。

講演1 『存在と意味』の意味

坂部 恵

主著『存在と意味』は、おそらく20世紀の代表的哲学書である『存在と時間』や『存在と無』の存在を意識しながら、何故そのように名づけられたのだろうか。「意味」という契機は、知識と経験と世界との「共同主観的存在構造」を確保すべき出発点（アルケー）として選び取られたのではないだろうか。精緻に組み立てられた「四肢構造」論を取る廣松にとって、およそ共同主観的でない「意味」はありえないからである。では、その共同主観的な「意味」を通して狙われ思考のうちに捉えられる「存在」は、ハイデッガーやサルトルのそれとあい覆うのだろうか。「事的世界觀」や「関係主義」の斬新な破壊力は重々認めるとしても、「もの」の問題はなお還元しつくせぬままに残るのではないか。「個体」の問題についてもまた、別様の考えがありえてよいのではないか。以上のことどもについて考えてみたい。

講演2 身心問題と間主觀性

木村 敏

「からだ」と「こころ」がどのような相関関係にあるのか、精神は脳の單なる產物なのか、それとも人間の行動を支配しているのは窮極的には心理機能なのか、この哲学的な難問は、そのまま精神医学の基盤にもかかわっている。在來の身心相関論の多くが挫折したのは、あるいは剝切な設問さえ導きえなかつたのは、それが單一個体における身体と精神の相互関係をめぐる議論に終始していたからだろう。この論題についての廣松渉の大きな功績は、それを最初から間主觀性・間主体性の問題として定位した点にある。

主觀や主体を論じる場合、それを従来のように個人の志向性あるいは行動に「内在」させる必要は毛頭ない。集団には集団の主觀的志向性があり主体的行動がある。しかもそれは通常、心理的なレベルでは意識されない生命的・身体的な現象である。この身体的な集団的間主觀性・間主体性が、心理的な心とは別の次元での「こころ」として個人の行動を動かしている。「対人関係の医学」である精神医学の立場から、これらの問題について検討を試みたい。

パネリストのご紹介

木村 敏(きむら びん)

1931年生まれ。京都大学医学部医学科卒業。名古屋市立大学医学部教授・京都大学医学部教授を経て、現在、龍谷大学国際文化学部教授・河合文化教育研究所主任研究員。専攻=精神医学・精神病理学。著書に『偶然性の精神病理』『人と人の間』『分裂病の現象学』『自己・あいだ・時間』『直接性の病理』『分裂病と他者』『異常の構造』『時間と自己』『あいだ』『形なきものの形』『生命のかたち／かたちの生命』など。

坂部 恵(さかべ めぐみ)

1936年生まれ。東京大学文学部哲学科卒業、東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程満期退学。東京大学名誉教授。現在、桜美林大学国際学部教授。専攻=近・現代哲学、哲学史。著書に『仮面の解釈学』『理性の不安』『「ふれる」ことの哲学』『かたり』『不在の歌—九鬼周造の世界』『ペルソナの詩学—かたり・ふるまい・こころ』『和辻哲郎』『鏡のなかの日本語—その思考の種々相』など。

三島憲一(みしま けんいち)

1942年生まれ。東京大学教養学部卒業、東京大学大学院比較文学比較文化修士課程修了。現在、大阪大学人間科学部人間科学科教授。専攻=ドイツ現代思想。著書に『文化とレイシズム』『戦後ドイツ』『ニーチェ』『ニーチェとその影』『近代をどうとらえるか』『ニーチェ／ツアラトゥストラ』(共著)、共訳書にベンヤミン『パサージュ論』(全5巻)など。

今村仁司(いまむら ひとし)

1942年生まれ。京都大学経済学部卒業、京都大学大学院経済哲学専攻博士課程修了。現在、東京経済大学教授。専攻=社会思想史。著書に『アルチュセール』『アルチュセールの思想』『貨幣とは何だろうか』『労働のオントロギー—フランス現代思想の底流』『暴力のオントロギー』『現代思想の系譜学』『理性と権力』『排除の構造』、共訳書にベンヤミン『パサージュ論』(全5巻)など。

野家啓一(のえ けいいち)

1949年生まれ。東北大学理学部物理学科卒業、東京大学大学院理学系研究科科学史・科学基礎論専攻博士課程中退。現在、東北大学文学部哲学科教授。専攻=哲学・科学哲学。著書に『物語の哲学—柳田国男と歴史の発見』(近刊、岩波書店)『科学の解釈学』『言語行為の現象学』『無根拠からの出発』、編著に『哲学の迷路—大森哲学・批判と応答』など。